

ダンス問い掛け連続トークセッション  
<身体(芸術)を語る/拡張する/使い倒す>

ダンス井戸端会議

令和3年度チャレンジ・アシスト・プログラム  
2021/07/04

About idobata.space

## ダンス井戸端会議

コンテンポラリーダンスをバックグラウンドに持つ、立教大学の映像身体学科卒業・在学の有志を中心に、様々なメンバーが集まり雑談をする会。

2018年10月発足以来、月一回のペースで活動を精力的に継続中。当初、東京ではなかなかダンサー同士が繋がる場がなく、まずは身近なメンバーでダンスについて考える会を開こうと雑談会からスタート。2020年より舞踊史や関連学問などの勉強共有会としても機能している。

今では立教出身者以外のメンバーも加わり、20名以上のメンバーが参加・活動する。メンバーは主に20-30代の、学生、フリーランスのダンサー、カンパニー所属ダンサー、制作者、劇場関係者、研究者など。

Webページ <https://idobata.space/>



Project Intention

## ダンスシーンの未来を考える

近年、若手のコンテンポラリーダンサーやダンス関係者にはコミュニティや集う場所がとても少なく、悩みや相談、熱い論議など、創造力が循環し、刺激をしあえる場が必要に思う。また、キャリアパスが描きづらくなっている昨今、先輩方のケーススタディや同世代同士の知見を共有していくことで、創造力豊かなダンスアーティストが生まれる土壌を作ることができる。

▶ このような考えから、ダンサーたちがサロンのように、立場の上下関係なく集える場を作り、狭義のダンスに留まらない広い視野や、新しい取組のアイデアが生まれる、自由闊達な共有の場を創出したいと考えている。

そして、自ら発信し、ひろく伝えていく力をつけるスタートの段階を仲間と共に身につけていくことが、ダンスの環境を良くしていく第一歩になるのではないか。

Current status

## ダンス井戸端会議を実施して見えてきた課題

### <ダンサー・アーティストの状況>

- ・所属を問わず集まれるコミュニティや場が少ない。
- ・上演や制作に際して相談、実験しようと思った時に気軽に相談できる場が少なく、孤独。
- ・思考→制作→発表の のノウハウなど、それぞれの知見、情報が共有されづらい。
- ・稽古や公演など忙殺され、ジャンルを越えた繋がりや実験などに乗り出しにくい。
- ・自力のみではキャッチアップできる情報が少なく、キャリアを考える上で困ることが多い。
- ・なかなか自分の言葉でダンスを語る機会がなく、「分からない」と言いづらいため、言語化することに苦手意識がある。
- ・アーカイブの意義を考えないアーティストも多く、作品が残りづらい。

## <2020年の活動>

- ・「ダンスを外から見つめる・語る」という4回シリーズのトークセッションを実験的に実施
- ・“身体”を主なトークテーマとし、ダンスの分野外の方とのトークセッション

DANCE ARTIST VIEW 2020  
セルフカルチャー - 若手が自分で考える育成プログラム -

**ダンスを外から見つめる・語る (仮)**

【第1回】  
中村悠介 (編集) × 小山まさし (ダンス)  
日時: 9月12日 (土) 20:00~23:00 ごろ  
場所: オンライン  
ゲストスピーカー: 中村悠介  
運営: ダンス井戸端会議

参加ご希望の方はこちらから

DANCE ARTIST VIEW 2020  
セルフカルチャー - 若手が自分で考える育成プログラム -

**ダンスを外から見つめる・語る**

▼参加申込▼

【第3回】 インターフェイスとしての身体  
和田夏実 (インタビュアー) × 中村悠介 (編集) × 井戸端メンバー (ダンス)  
日時: 11月26日 (木) 20:00~23:00 ごろ  
場所: オンライン (YouTube + Zoom)  
ゲストスピーカー: 和田夏実  
運営: ダンス井戸端会議



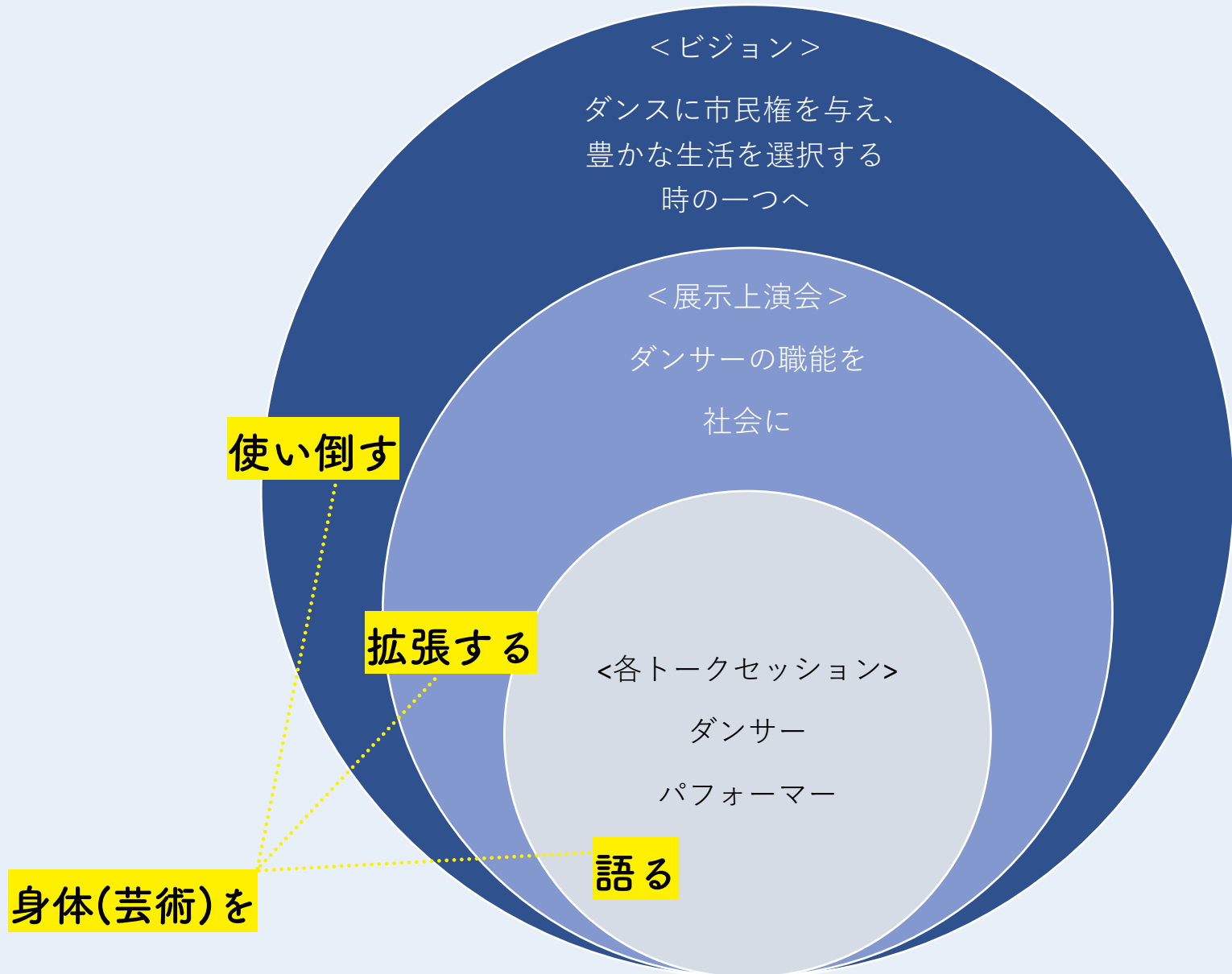
▲ 2020年11月26日に行われたダンス井戸端会議 催のプログラム  
「ダンスを外から見つめる・語る [第3回]」 YouTube Live配信キャプチャ

Concept

# ダンス問い掛け連続トークセッション

<身体(芸術)を語る/拡張する/使い倒す>

# ビジョン



challenge

## 今後、実践していきたいこと

### ①ダンサーの集まる場

- ・ 紋切り型の講座形式や、とりとめのない交流会・雑談会ではなく、ゲストを含め参加するメンバー全員が対等な立場で、安心して参加でき、自由に発言し対話できる場つくる。
- ・ 長期的、継続的に開催し、ダンサーのよりどころとなる場をつくる。

### ②外からの目線の獲得

- ・ 狭義のコンテンポラリーダンスの 域の外の方たちとの対話を通して、異なった分野とのコミュニケーションの取り方や、繋がり方を参加者それぞれが模索する。

### ③記録していく力

- ・ ダンサーやアーティスト自身の企画・発信力・社会接続を強化する

### ④社会との境界で起きる化学反応を積極的に待つ



### <社会にとっての価値>

・ SNSの発達などによって自分の属性に合った情報のみに晒され、他者に出会うことが少ない現代社会において、「多様性」や「繋がり」という言葉を掲げつつも、一方で異質な価値観に対する寛容性が低くなっている。

ダンスやアートの活動を、制作やディスカッションする過程から開いていくことで、世界への多様な視点や気づきを当事者以外にも提供することができるのではないか。

・ ひいては、生きるための知恵としての身体の使い方を多くの方と共有できるのではないか。

→ダンスに市民権を与え、豊かな生活（ウェルビーイング）の選択肢の一つとして多くの人がダンスを使い倒せる社会の実現